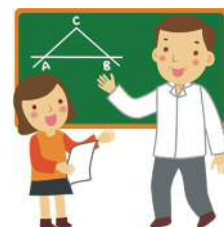


《教育長メッセージ 第20号》

『授業づくり』

久しぶりに学校教育についてお話しします。

「授業」については、第12号であれこれお話ししましたが、今回は、さらに詳しく「授業づくり」についてのお話しをしますが、私の経験上の考えですので、さまざまな考え方がある内のひとつであるということで、お読みください。そして、どこかで授業を参観する機会がありましたら、このことを思い出してくださると、より興味深く授業を楽しむことができますので参考にしてください。



授業は、教える内容は学習指導要領で定められていますが、どの教材(題材)を使用するかは、教員が決めます。多くの場合は教科書を使います。例えば、国語なら、物語と子どもたちとの出会いをどのように演出するかが、教員の腕の見せ所です。

ひとりひとりの子どもたちの生活経験や身につけている学習の力を把握し、また、物語の内容を細かく分析して、子どもたちがどのように物語と出会うことが学習目標を達成するのに効果的かを考えます。

そして、たとえば10時間で扱う教材なら、10時間分の大まかな学習計画を立てます。教員としては、学習計画を立てるのがけっこうワクワクする作業です。

今年のこのクラスなら、この学習方法で、この学習展開をした方が、意欲的に学習に取り組み、学力を高めることができるだろうと考え、学習計画を立てるのです。

次に、1時間1時間の学習の展開を考えます。学習のねらいを定め、1時間を、はじめ・なか・まとめと3段階ぐらいに分けて、学習課題や子どもたちへの投げかけの言葉(発問)を考えます。子どもたちひとりひとりの反応を予想して、いくつかの案を想定するのです。

もちろん、ひとつの流れを決めて、実際に授業をするのですが、教員の思いどおりに授業が進むとは限らず、子どものその場の反応に合わせて、計画を修正する必要があるし、前もって、いくつかの案を想定します。

教員の投げかけから、子どもたちが意欲的に学習に取り組み、子どもたちの多様な考えや思いが引き出され、多くの子どもの意見で学習が進められることが理想です。そして、教員の予想を上回る意見が出され、教員の想定外の展開になることもあります。そんな時は、教員も授業が楽しくなります。参観している人も授業に引き込まれていきます。

教員は、日々、授業づくりをします。プロとして取り組みます。ひとりひとりの子どもに対応することから、授業は奥深く、どちらかと言うと、満足する授業はほとんどなく、それゆえ、よりよい授業を作るために努力するのです。毎年、毎年、努力するのです。

そんな絶え間なく努力する姿勢が、授業のプロである教員の証であると思っています。

教室の中のすべての子どもが目を輝かせて、あれこれ考えて、自分を表現して、ひとりひとりが活躍する授業を教員はめざしています。

よりよい「授業づくり」は、教員の終わることのない挑戦なのです。

がんばれ！海老名の仲間たち。

今回は、「人権意識」について、自分の子どもの頃の経験をもとに、話をしてみたいと思います。